

授業研究を「核」とする学校づくり運動に関する総合的研究 —斎藤喜博所蔵資料の検討—

Overall Research on the Creative School Management Movement Centered on Teaching-Related Research; Focusing on the Examination of the Features of the Materials held by SAITO Kihaku

狩野 浩二¹⁾

KARINO Kouji

要旨

斎藤喜博は、1981年に急逝した。そのため、大量に残された資料群の行方は、全く宙に浮いたままである。近年、教授学研究会の会の尽力により、短歌関係の資料群は、群馬県立土屋文明記念文学館に所蔵されることとなった。しかしながら、教育実践関係の資料群は、相変わらず、そのままである。教授学研究会の会では、斎藤喜博の遺族との交渉により、その資料群の保全、整理を目指してきた。しかしながら、さまざまな事情が複雑に絡み合い、その取り組みは困難を極めている。今回、その交渉の過程において、斎藤喜博の遺族から、資料群の一覧がもたらされた。筆者は、その一覧の写しを入手した。そこで、今回は、その一覧の全貌を明らかにするべく、一覧のデータ化を行ったところである。その概要を紹介する。

1. 斎藤喜博資料の概要

本報告は、筆者が継続して行っている「授業研究を核とする学校づくり運動に関する総合的研究」の一環として取り組んでいるものである。今回はとくに斎藤喜博の資料に関する調査結果を報告する。

斎藤喜博は、病を得て1981（昭和56）年に亡くなった（以下、斎藤喜博に関する事実は、後述す

る年表を参照）。1911（明治44）年に生まれ、70年の生涯である。1952（昭和27）年に41歳にして群馬県島小学校の校長となる。そしていわゆる「島小教育」を11年間継続する。この時代において学校公開研究会を8回連続で開催し、全国から参観者を集める。その数は、延べ一万人ともいわれている。

『斎藤喜博全集』は、第Ⅰ期全集と第Ⅱ期全集とをあわせて全30巻である。小学校を主たる教育

¹⁾ 十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科

Department of Elementary Education, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

キーワード：斎藤喜博、島小、学校づくり、教授学、授業研究

実践の場とした教師が全集を出すということ自体が異例である。それに加え教育科学研究会教授学部会やその後の教授学研究会において、常にその中心に存在していた。いうまでもなく小学校教師としてのひとつの典型像を築いたのが斎藤喜博である。

しかしながら、生前を含め没後においてもある意味で不遇の扱いを受けているのも事実である。その一つの証左として斎藤喜博の資料の扱いがある。斎藤喜博の没後、これまで何度か斎藤喜博の資料を整理する機会があった¹。しかしながら、後述の通りその都度さまざまな事情で資料群（実物）の整理はなされることはなかった。

斎藤喜博とほぼ同時代に生まれ、活躍した教師として、国分一太郎や東井義雄が挙げられる。国分一太郎は、山形県において、東井義雄は兵庫県において、それぞれ蔵書や関係資料が収集され、整理されている。それに比して斎藤喜博は、まったく手付かずの状態である。現在のところ、短歌関係の資料群は、群馬県立土屋文明記念文学館によって整理され、保存されることがきまった。しかし、斎藤喜博にとって教育界における扱いがまさに「不遇」である。短歌関係以外の資料は、そのままの状態ですらに保管されることとなった。

今回、資料リストが筆者の手もとに届くこととなった。リストはレポート用紙に手書きされたもののコピー（複写）である。今回はそのリストの整理過程において判明した事実（概要）を報告する。

2. リスト入手の経緯とその後

リスト入手の経緯は以下の通りである。

横須賀薫から筆者がリストの写しを譲り受けた。そのリストは、B4判コピー用紙に複写（コピー）されたものである。コピーは、二分冊（クリップ留めで2分割されている）である²。記録者は未詳である。

リストのコピーに掲載された文献等の手書き資

料を、今回は分析しやすいようデータ化した。現在、全件のデータ入力終了した。それをさらに内容によって分類することとした。

データの分類は、公刊されている資料、例えば、単行本は、もっとも一般的であると思われる日本十進分類法（NDC）により行った。このことにより手書きリスト上の明らかな転記ミスや誤字、脱字に気づくことにもなった。非公刊のもの、例えば、学校でつくられた謄写版刷りの資料などは、その形態や内容により分類した。

データとして入力した件数は全体で4,668件である（全集などのセットものは一件と勘定している）。そのうち、公刊され、NDC分類ができた単行本が2,868件である。資料全体から見れば、単行本が全体の6割以上を占める。その他、手書きのノートや写真、映像、画像など非公刊のものが1,800件である。

後述するように斎藤喜博の資料は、1947（昭和22）年の水害により、その大半が失われた³。したがって、実際には今回のリストには掲載されなかった資料が多く存在したということである。水害により失われた蔵書を斎藤喜博は、5,000冊と記録している⁴。この数は、おそらく概数と思われるが、しかし、斎藤喜博が生涯に収集した資料類とほぼ同数の量の蔵書がこの災害により失われたということである。

斎藤喜博は、今年で生誕109（没後39）年を迎える。時間と共に資料は劣化すると思われる。そうした状況を考えると、今後、資料の保全、整理等がますます重要になる。本報告により、その全体像に迫ることにより、研究資料としての重要性を再確認したい。

3. NDCによる分類とその概要

公刊された資料のなかで最も量的に多い資料は、9門（文学）に関する資料である。点数は、1,242件（42.8%）である。内容としては、日本文学、詩歌が多い。特に、「アララギ」や「ケノク

表 1

部門	件数	割合
9 門	1242	42
3 門	884	30
2 門	164	5
7 門	157	5
6 門	127	4
0 門	108	3
1 門	97	3
4 門	65	2
8 門	32	1
5 門	18	0.6
不明	6	0.2
計	2900	100

ニ（1946年6月土屋文明、斎藤喜博が主催した群馬県における短歌結社）」との関係で短歌関係者から寄贈された歌集が多い。このことは、斎藤喜博が歌人であったこと、生涯土屋文明を師と仰いだことなどから、おおよそ推測できることである。

これらの短歌関係資料は、先述の通り群馬県立土屋文明記念文学館に所蔵されることとなっている。このことにより、資料の利活用が進み、研究が進展することと思われる。

その他、英米、露、仏等の外国文学の翻訳が一定数ある。授業研究とのからみで、国語の教材として活用した作品が多く含まれる。

鳥小においては、一般的な教科用図書の教材では十分に子どもの力を引き出せないと判断し、教科用図書を十分に活用した上で、さまざまな作品を探し、それを教材として使用していた。そのことを裏付ける内容である。

二番目に多いのが、3門（社会科学等）である。斎藤喜博自身が教師であり、教育研究をすすめてきたことから当然のことと思われる。3門の点数は、884件（30.5%）である。この資料の中には自著を多く含む。先述の通り小学校の教師としておそらく唯一全集を刊行したということがこの資料群を多く含むことと関係していると思われる。

この資料の中には、鳥小を参観した教師や研究者からの寄贈本も多い。鳥小を支える教師や研究

者が数多く存在したということを裏付ける資料群である。

上記の9門にも、同様の寄贈本がある。鳥小が学校づくりの運動であり、さらには、教育や文化面での運動ともなっていたことの証左である。

2門（歴史、地理等）は、164件（5.7%）である。9門（文学関係）と3門（社会科学関係）を合計すれば、単行本のうち、2,125件となり、その占める割合も73パーセントを超える。したがって、2門は、三番目に多い蔵書ではあるが、全体からの割合で見れば5%超である。9門と同様に自著を含む。

自然地理や人文地理など、教育課程との関係（意外に教材を重視している）も見られる。一般的には斎藤喜博は、どのような教材でも授業に生かしていったといわれている⁵が、蔵書からみれば9門が突出して多いのはさまざまな作品を教材化していったことと関わりがあると思われる。同様に、歴史や地理などへの関心も強くあったことが想像される。

7門（芸術等）は、157件（5.4%）である。前出の2門とほぼ同程度の蔵書数である。斎藤喜博が表現活動の指導や歌唱指導などを重視したことと深い繋がりがあると考えられる。また、斎藤喜博自身が歌曲やオペレッタ、総合表現などの創作（とくに作詞の面で）に力を入れていた⁶ことから、芸術関連の蔵書が一定の割合を占めていると考えられる。教科の指導において、国語や音楽、体育を重視したということも反映していると考えられる。

6門（農林水畜産等）は、127件（4.4%）である。斎藤喜博は、植物に関する文章を多く残している。自邸には、さまざまな山野草を育てていたことでもよく知られている。後述の5門と同様、教科目へのまなごしを強く感じるところでもある。

0門（総記等）は、108件（3.7%）である。自身の全集等もこの中に含むため、必ずしも特色とは言い難いところである。レファレンス的な文献が多く含まれ、各教科における授業研究にも活用

表 2

発行年	蔵書数 (出版年)	蔵書数 (10年ごと)	事項
1905	1		
1905	1		
1910	0	1	
1911	1		出生 (3/20)
1912	1		
1914	2		
1915	2		
1916	3		
1917	2		
1920	0	11	
1922	1		
1923	0		尋常科卒業 (12歳)
1924	3		
1925	6		
1926	2		
1927	7		
1928	11		
1929	14		短歌づくり開始 (18歳)
1930	4	48	群馬師範卒業、玉村小へ (校長:宮川静一郎) (19歳)
1931	10		アララギ入会 (21歳)
1932	11		
1933	13		
1934	11		
1935	7		病気がちで休職、土屋文明と出会う (24歳)
1936	11		
1937	7		
1938	19		
1939	25		
1940	14	128	
1941	25		『教室愛』(三崎書房) (30歳)
1942	35		『ゆずの花』(文録社) (31歳)
1943	46		芝根国民学校へ異動、『教室記』(鮎書房) (32歳)
1944	22		
1945	11		
1946	46		歌誌「ケノクニ」創刊、『童子抄』(古今書房) (35歳)
1947	49		玉村中へ (36歳)、水害により蔵書5,000冊が亡失
1948	43		
1949	61		群馬県教組教文部長 (38歳)
1950	47	385	
1951	72		第一歌集『羊歯』(草木社) (40歳)
1952	75		教科研結成に参加、島小校長 (41歳)
1953	78		島小研究報告第一集、第二歌集『證』(草木社) (42歳)
1954	78		教育二法案公述人 (衆院) (43歳)
1955	86		第一回島小公開研 (44歳)
1956	79		
1957	63		
1958	92		『未来につながる学力』(麦書房)、『学校づくりの記』(国土社) (47歳)
1959	75		
1960	110	808	写真集『未来誕生』(川島浩撮影、麦書房)、『授業入門』(国土社)、『表現と人生』(国土社) (49歳)
1961	89		『授業以前』(麦書房)、第三歌集『職場』(白玉書房) (50歳)
1962	124		近代映画協会「芽を吹く子ども」撮影開始、『斎藤喜博著作集』(全八巻、麦書房)、『校長の指導性』(編、明治図書)、『島小の授業』(編、麦書房) (51歳)
1963	111		境町東小校長、『授業の創造』(編、明治図書)、『島小の女教師』(編、明治図書)、『私の教師論』(麦書房)、『教育の演出』(明治図書)、『教育現場ノート』(明治図書)、『授業』(国土社) (52歳)
1964	113		境小校長、教科研教授学部会創設、『授業の展開』(国土社)、『島小物語』(麦書房) (53歳)
1965	113		教科研全国集会に教授学分会開設、『一つの教師論』(国土社) (54歳)
1966	102		境小音楽会、『現代教育批判』(国土社)、『可能性に生きる』(文藝春秋) (55歳)
1967	117		神戸御影小指導 (74年まで)、NHKラジオ「人生読本」放送、現代の女教師 I 『教師として市民として』(編、明治図書、69年まで全六巻)、『教育と人間』(国土社)、『島小の芽を吹く子ども』(解説、明治図書) (56歳)
1968	101		境小公開音楽会、『校長の良心』(編、明治図書)、『教師の実践とは何か』(国土社) (57歳)
1969	99		境小校長退職、『教育学のすすめ』(筑摩書房)、『わたしの授業観』(明治図書)、『斎藤喜博全集』第一巻 (国土社、以降71年まで全一八巻) (58歳)
1970	142	1111	佐賀大集中講義、林竹二に出会う、『君の可能性』(筑摩書房)、『日本の教育を考える』(東芝教育技法研究所)、レコード「風と川と子どもの歌」(筑摩書房)、『教授学研究 1』(柴田義松、稲垣忠彦、吉田章宏共編、国土社、以降79年の10まで10冊、『第二期教授学研究』81~84年)。(59歳)
1971	130		宮教大集中講義、入院 (60歳)
1972	112		個人雑誌『聞く』創刊 (82年の30集まで刊行)、自宅で「第三土曜の会」開催、広島大田小指導、『教師が教師となるとき』(編、国土社) (61歳)
1973	111		教科研を離れ、教授学研究会会結成 (62歳)
1974	124		宮教大教授、教授学研究会の第一回大会 (淡路島)、室蘭啓明高指導、写真集『いのち、この美しきもの』(川島浩撮影、筑摩書房)、『境小の教師』(編、明治図書)。(63歳)
1975	136		宮教大退任 (78年まで指導を継続)、宮教大授業分析センター開所式で、記念授業「ふるさと」、小松市東陵小指導、『授業と教材解釈』(一葉書房)、『授業をつくる仕事』(一葉書房)、『授業は教師がつくる』(編、一葉書房)、『教師の資質をつくるために』(編、国土社) (64歳)
1976	136		『斎藤喜博対話集 一つのこと』(一葉書房)、『授業小言』(明治図書)、『授業の可能性』(一葉書房)、写真集『斎藤喜博の仕事』(川島浩撮影、国土社) (65歳)
1977	129		林竹二と別れる、『介入授業の記録』(上、一葉書房、以降79年まで全5巻)、『わたしの授業』(第1巻、以降82年まで全6巻)、『教授学に学ぶ』(編、明治図書) (66歳)
1978	111		NHK「教える—斎藤喜博の教育行脚」、『対話 子どもの真実』(林竹二との対談集、筑摩書房) (67歳)
1979	100		入院、『教師の技術と思想を学ぶ』(編、明治図書)、『教師の仕事と技術』(国土社)、合唱曲集『子どもの四季』(一葉書房)、『大空の歌』(編、筑摩書房) (68歳)
1980	86	1175	『人と自然と』(一葉書房)、『授業の解釈と批評』(国土社)、合唱曲集『一つのこと』(一葉書房) (69歳)
1981	69		『事実と創造』(一葉書房、以降95年まで175号)、7/24没 (70歳)
1982	34		
1983	37		『第二期 斎藤喜博全集』第1巻 (以降84年まで全一二巻)
1984	29		
1985	29		
1986	24		
1987	20		
1988	14		
1989	24		
1990	14	294	
1991	16		
1992	17		
1995	1		
1996	1		
2000	0	35	
2008	0	1	
計	3997	3997	

していたと思われる。

1 門（哲学等）は、97件（3.3%）である。ここにも自身の著書を含んでいる。

4 門（自然科学等）は、65件（2.2%）である。動物行動学、医学、一般的な自然科学など、幅広く読んでいたと思われる。2 門同様、教科目との関わりが深いと考えられる資料群である。

8 門（語学）は、32件（1.1%）である。国語辞書が幅広く集められていること、ことわざや慣用語などの辞典にも特色を感じさせるものがある。国語学（日本語学）への関心も高かったようである。

5 門（技術、家政等）は、18件（0.6%）である。量的には少ないが、建築や食品、公害などに関する文献も含まれている。

その他（NDC分類のないもの、タイトル不明のもの）6 件（0.2%）である。

斎藤喜博年譜（『斎藤喜博全集』1971年、第15巻2、325ページ）によれば、昭和22年9月15日「大洪水あり。生家（芝根村川井、現玉村町一筆者）においた蔵書五千冊を失う」ということである。単行書として現存するものが3,000件弱であり、それをはるかに超える蔵書がこの時失われたということである。

表2は、斎藤喜博の蔵書（単行書のみならず、雑誌等、発行年の分かるものをすべてリスト化したもの）から、出版年ごとに何冊の蔵書があるかをカウントした表である。出版年とその資料が斎藤喜博の蔵書となった年は、必ずしも重なるものではないが、おおよそ各年ごとに一定程度の冊数が蔵書として加わっていったことを知る事が出来る。

水害により失われた蔵書は1947年までのものであるから、斎藤喜博の両親や祖父母の時代から蔵書として大事にされてきたものを相当数含んでいたと想像できる。表2は発行年ごとの蔵書数と、それを10年刻みで合計した件数である。事項には、斎藤喜博の年齢（括弧書き）とともに、主な出来事、自著などについて横須賀薫による整理に

もとづき、その内容を記述した。

この表の事項部分には、先述の通り、横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』1997年、国土社、178～183ページから、年譜部分を引用したもの（一部加筆した）を対照させた（但し、出版年からみて、蔵書がない年は省略した）。蔵書が失われた年までに刊行された資料は非常に少ないことと同時に、自身の著作等を含むとはいえ、亡くなる1980年代に向け蔵書数が増加していくことがわかる。

4. 蔵書と関連資料との関係

今回のリストの件数を刊行されたものや非公刊のものなどをあわせて総合すれば、下表の通りになる。4,668件の全体からみた場合、単行本は、全体の6割をこえる。件数は、NDC分類や発行年が未詳のものも含むために、前述とは異なる。

雑誌は、3割を少しかける程度である。「アララギ」や「ケノクニ」などの短歌結社関係の雑誌のほか、斎藤喜博の個人雑誌であった『開く』（明治図書出版）、教授学研究会の機関誌となる『事実と創造』などが含まれている。全般的に、雑誌類は整理されており、晩年の1980年代以降において、未整理の雑誌が残されている程度である。

書簡類やノート、メモなどもしっかり整理され、リストからは、それらが書架等に整理されていたことがわかる。斎藤喜博がはじめて校長となり、赴任した島小において、釘抜きや金鎖を手

表 3

総計	件数	割合
単行本	2868	61.4
雑誌	1397	29.9
文書	332	7.1
音声	36	0.7
画像	17	0.3
その他	11	0.2
文具	4	0.1
映像	3	0.1
合計	4668	

に、校内の整備に取りかかったというエピソードが残されている⁷。蔵書リストからも、斎藤喜博の資料への心配りを感じさせるものがある。

7%、332件の文書は、謄写版刷りの冊子や各学校から贈呈された学校文集、実践記録集などである。斎藤喜博の著作には、さまざまな形で各学校の実践記録が引用されている。それらが大切に保管されていたことがわかる。これは今後の検討事項ではあるが、鳥小などを参観し、その感想を斎藤喜博へ書き送った学校や教師は、相当数にのぼる。そうした関係者の資料がどの程度残されているかということも、たいへん重要なことであると思われる。

また、鳥小や境小関係の資料類がダンボールに収められており、斎藤喜博自身のノート類も多数含んでいる⁸。今後の資料整理にあたっては、全体からすれば7%に過ぎない分量のこうした資料類に、斎藤喜博研究をすすめる上での一次資料（とくに未発掘、未発見の資料が含まれている可能性がある）が含まれている可能性がある。

音声や画像、映像等の資料は、例えば、『斎藤喜博の教育行脚』、『教師の時間』など、NHKが制作したTV番組、その番組作成時に撮影された映像などは、教授学研究会の会によって保存され、活用が図られている。今回のリストには、境小の画像等⁹が残されており、これらは、管見の限り、未発掘の資料である。

その他、リストには、ただ単に茶封筒とのみ記載されたものが多数含まれている。

これらに何が含まれているのか、今後は、こうした資料群の確認作業が是非とも必要である。記して他日を期したい。

注

1* 横須賀薫によれば、何度か資料を整理する機会はあったが、意見がまとまらなかったということである。

2* 1冊目が58頁、2冊目が63頁である。

3* 『斎藤喜博全集』1971年、国土社、第I期、第

15巻2所収の「年譜」参照。

4* 『斎藤喜博全集』1971年、国土社、第I期、第15巻2所収「年譜」

5* 青森県の七百中学校の校内研究において、斎藤喜博が歌唱指導をしたことがあり、その際、適当な教材がないのであれば、校歌であれば歌えるでしょうといい、校歌の指導をみごとに行ったというエピソードがある。同行していた横須賀薫の証言による。

6* 総合表現『利根川』、『子どもの四季』、『子どもの世界だ』のほか、歌曲として、『一つのこと』、『はたるぶくろ』など、作詞した作品も相当数にのぼる。

7* いわゆる師範タイプの教師は、資料をそのサイズごとに整理するなど、実質よりも形式を重んじたといわれている（水原克敏より、教示いただいた）が、斎藤喜博の場合、リストを見る限りにおいて、そうしたことを想起させる事実は見えなかった。

8* リストには、荷姿として、「ダンボール」や「封筒」とのみ記載されている。その中身にいかなる資料が残されているのか、早急に調査する必要がある。

9* 撮影者であるフォトグラファーの川島浩（故人）が残した関係資料において、境小の写真類は未発掘である。このリストにある境小の写真類がもし良い状態に残されていれば、あらたな研究材料として大変貴重であると思われる。

【附記】

本稿は、公益財団法人野間教育研究所において設置された「教育と公共」に関する研究部会において、筆者が報告した内容を整理し、加筆修正したものである。宮城教育大学名誉教授の横須賀薫から資料の提供を受けた。記して感謝申し上げます。